

善因の松竹書意

特257

686

4

3

3

3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



玄々堂荻汀宗匠著



荻内宗匠於ける芭蕉

附芭蕉句



喜峰社藏版

緒言

我が庄内に於ける俳諧の蓋觸は何時頃か不詳だが、元祿二年夏、芭蕉翁当地に巡錫して、羽黒・鶴岡・酒田にその種子を蒔いてから正麻の極意を傳達されたのである。翌年その高弟支考が当地に回遊して天下に我一人の大風呂敷を換は己が地盤を固めてから我が鶴岡は所謂美濃派に占領されたのである。之れが抑、我が庄内の啓蒙時代であつた。

芭蕉は蕪村・一茶、子規と共に我が國俳壇の大家である。ことに芭蕉に至つては実に斯界の大先覚者であつた。人皆俳聖と慕めてゐる。其の俳想には禪味を帯び俗界を超越してゐる。されば、その意深淵にして、而かも人生の機微を穿ち人をして感嘆措かざらしめたのである。翁は發句、俳文何れも達者であつたが、その得意は歌仙興であつた。されば歌仙は翁の生命といふべきである。俳文の傑作は真の細道である。ことに由緒に入つてからの俳文発句は一種すぐれた異様の光彩を發揮してゐる。その細道中庄内に於ける記事には歌仙を初め書漏れた處頗る多い。之れ翁

の故意に出づる処なるべけれども、聊か惜しい心地がする。

玄々堂蘆汀宗匠、茲に鑑みる処あり、多年之れが研究を重ね、昔くの資料を蒐集せられ、茲に庄内に於ける芭蕉遺詠の完備せる著述を見るに至った。ことに「吹浦や」の出典を明瞭にして、袖の浦海上の訥涼よりの所産なるを知るに至つてはその適切なる寫実描寫、覺えず痛快を感ぜずを知られない。卷末所載の不玉の歌仙行に對する翁の批判に至つては、そのうっかり、誓、句、位の卓抜なる識見に基づき、その評語の切実にして指導の懇篤なる、翁ならざはと思はせる師々紙上に躍如たるを覺える、實に得難き玉稿である。

蘆汀宗匠は古稀の歳を重ね、童顔、白鬚猶墨鏡として研究を重ねつゝあり、繞いて庄内の俳諧史を編纂中と聞く、斯道の名ゆゑ洵に慶賀すべきことである。不肖、先輩の名著に對し礼を失するも成言の成立や編纂の趣旨を明にした次第である。敢えて僭越を顧みず一言以て緒言とする。

昭和十年二月吉日

吟詠人 竹外

莊内に於ける芭蕉

玄々堂蘆汀宗匠述

芭蕉翁が、奥の細道に筆をとられし紀行は、元禄二年三月廿七日、翁四十六歳の時弟子曾良と呼ばれし者、即ち河井惣五郎と云ひしを同伴して江戸を分立たれ、総野の地に杖を曳き、陸奥の地、宮城野、松島を経て、平泉なる中尊寺に、兵どもが夢の跡、を追懷せられしは五月十四日なり。それより尿前の峻路を越え千辛万苦して漸く尾花沢なる鈴水清風が家に杖を留む。最上川水急なるに、五月兩降続きで増水し其の逆巻く奔流を飲にて下り、我が庄内の地に入りしは六月三日頃と思はる。

最上川は陸奥より出て、山形を水上とす。こてんははやぶさ等云ふ恐ろしき難所あり、板敷山の北を流れて果ては酒田の海に入る。左右山覆ひ茂みの中に船を

(略註) 松尾芭蕉、名は京房、号を拙翁、後芭蕉と称し、伊賀の人である。初め藤堂氏に仕へ、後辭して専ら風雅を好した。俳諧の三匠であり、俳聖とよばれてゐる。元禄七年十月十一日大阪の旅の空で、旅に病んで夢は枯野をのけぬるの一、句を遺して永眠した。時に年五十一。

「こてん」は基点にて河中に居る点々と横りて水の流れの時等は甚だ危険なりと云ふ。

「はやぶさ」は奔流が恰も鷲の小鳥を逆ぶる如く舟を止めんとして止むるはす難所の

難所なりと云ふ。

「板敷山」は庄内と最上の境即ち清川と古口との中間にあり、山一帯を云ふのみならず、山に近き出羽の板敷の山に任経が住むとわがしきと云ふ古歌あり。

「稲舟」古今集、東歌に「最上川登れば下る稲舟のいなにはあらまじ月ばかりに又扶水集山家集、崇徳院、むのみ川綱手ひくと、もいな舟のしはしが程はいかりおろさん」

「白糸の池」(義経記)に「(前略)かくて御舟をのぼす程に、十丈より落ちたきる滝あり。北の方(源義経の妻)是をば何の滝と云ふと、由しければ、白糸の滝と由しければ、光の方のくそつづけ給ふ。最上川瀬々の岩飛せきとゆよ客らでぞ廻ほる白糸の滝」

。最上川岩懸す浪は月さえて夜面白き白糸の滝とあり。

「仙人堂」戸川神社傳説に曰く、源義経の臣菅原朝俊は、仙術を得て此処に隠れたりと云か?

下す、是に船つみたるを御舟といふらし。白糸の滝は青葉の隙々に落ちて仙人堂岸に臨みて立つ、水みなぎりて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川 (細道伝文)

(奥細道拾遺)に最上川の一巻あり。右に之れを述べん。

山形町一葉子の宅に於て興行

五月雨をあつめて早し最上川

強をつなく岸の橋杭

瓜はたけささよふ空に影もちて

里をむかふに、乗の細道

牛の子に心なくさむ夕間暮

雨雲おもしろ襦の吟

他笠を被にたて、山おろし

松むすび置く、園の境目

永樂の古き寺領を頂きて

芭蕉

一葉

曾良

川水

淡

蕉

川

良

蕉

夢と合する大鷹の紙
薫もの、名を曉とかこらたる
爪紅粉うつる双六の石
巻上る簾に見の志入て
煩ふ入に告くる秋風
水かふる井出の月こそ哀なれ
磁うちとて撰か出さる
花の後、花を織らする花むしろ
涅槃いとなむ山陰の塔
藤多村は浮世の外、春富みて
刀かりする甲斐の一乳
葎垣入も通らぬ閑としる
物書く毎に削る松かせ
星祭る髪はしらびのかゝるまで
集に遊女の名をと、む月
鹿笛に貫ふおかし塗り足駄

蕉 良 川 蕉 淡 川 良 蕉 川 良 蕉 淡 川 良 蕉

崇売に出で家路忘るる
 ねふた咲く木蔭を昼のかけろひに
 たろく鳴らす千日のかね
 故郷の友か跡をふりかへり
 言葉論する旅の衆 合
 雪みぞれ師走の市の名残とて
 煤掃きの日を草庵の客
 亡人を古き懐紙にかそへられ
 やもめ鳥の迷及いりあひ
 平包み翌日も越へき花の峰
 山田の種をいはふ村雨
 翁は最上川を松にて下り、清川に着き直ちに閑所に身元
 を届けて狩川に出て、赤川を経て手向に至る。兼ねての友
 入なる、羽黒山の圓司役を勤むる進藤右吉俳名呂丸と云ふ
 人を訪ね、同人の紹介にて、当時羽黒山別当代理會覚阿闍
 闍を訪ひ同寺の別業なる南谷の別院を旅宿に当てられたいと

川 蕉 良 川 蕉 良 川 蕉 良

一 別当代会覚阿闍闍
 本山別当は江戸上野東
 叡山より任命せらるる
 ことになつてあるが當
 時は欠負にて會覚と呼
 びし人代りせらるる
 此の人元禄四年に退任
 して美濃國谷汲なる華
 嚴寺に轉任せられ當寺
 にて元禄時代の末頃
 入寂せり

懸篤なる待遇に旅情を慰めらる。
 六月三日羽黒山に登る。圓司右吉と云ふ者を尋ねて、
 別当代会覚阿闍闍に謁す。南谷の別院に舍して憐愍の
 情こまやかに饗せらる。
 四日、本坊において俳諧興行。
 有がたや雪をのをらす 南谷山(細道中文)

此時本坊に於て俳諧興行あり、その席には手向の入梨水。
 折ふし来会せたる近江徹道寺の僧圓入、奈良法輪虎の殊妙。
 京都の人釣雪寺加はりて満尾す。

六月四日於羽黒山本坊興行
 ありかたや雪をめぐらす風の音
 在も程人のむすふ夏 草
 川 鮎の鮎に蜚を引立て、
 鶴のとふあど見ゆる三日月
 澄む水に天にうかへる秋の暮

芭蕉 子丸 曾良 釣雪 殊妙

北も南もきぬた打ちけり
 眠りては晝のかけりに笠ぬきて
 百里の旅を水曾の牛追ひ
 山盡す心に盛の記を書かむ
 斧持ちすくむ神木の森
 歌よみの跡しにひ行く家なくて
 豆うたぬ夜は何と泣く鬼
 古御所を寺になしたる松皮茸
 糸に立枝にさまよふの萩
 月見よと引き起されて耽しき
 髪あふかするうすものつゆ
 まつはるゝ犬のかさしに花折て
 的場の末に咲ける山吹
 春を経し七つの年の力石
 汲みていたゞく醒か井の水
 足曳のこしかたまでもひねり鏡

梨水
 雪 菰 丸 良 丸 雪 丸 蕉 丸 水 蕉 丸 良 丸 蕉 丸 雪 丸 入 田

歌の門に二夜寝にけり
 かき消る夢は野中の地藏にて
 妻乞ひするか山犬の声
 うす雪は椽の枯葉の上寒く
 湯の香にくもる朝日淋しき
 むさゝかの音を狩宿に矢を射て
 篠のけしたる夜すからの法
 月山の雲の風を骨にしむ
 蝦老が火残す稲妻の影
 ちるかひの栞に見付けし心太
 鳴子おどろく片敷のまど
 ぬす人につれそふ妹が身を泣いて
 祈もつさぬ濁々の神
 盆のさかやに流す花の波
 幕打あくる乙鳥の舞

右歌仙行 芭蕉七 梨水五

良 丸 蕉 丸 水 蕉 丸 良 丸 雪 丸 入 雪 丸 蕉 丸 水 蕉 丸 良 丸 蕉 丸 雪 丸 水 會 覺

此の歌仙には「雪をめぐらす南谷」とあり、細道に「雪をかほらす南谷」とあるは、よく推敲の上なるべし。翌日即ち六月五日羽黒山神社を参詣せられた。其の規模の雄壮にして宏大なるに驚き崇敬の念禁ずる能はさらしめたりと覺ゆ。此の御山をしてかく輪煥の美に輝かしめたるは、数拾町の磴道を造りたる山中興の傑僧天宥法印なれば、翁は其の遺跡を追想し悉しく祭文一運を手向られたり。

羽黒山別当執行不介叟天宥法印は行法いみじき庵へ有りて止観圓覺の神智才用入に施して或は山を穿ち石を刻力て巨壘か力女媧のたぐみを盡して坊舎を築き階を祚れるは雲の滴をうけて笕の水を廻らせ石の器木の工み此山の奇物と知れるもの多し一山拳りて其名を慕ひ其徳を仰く寔に及た、ひ羽山淵基に等しされども如何なる災のなせるにや有らん相互の圓八重の沙羅身を原

(略註)「能除大師」天台時代は紫峯天皇の皇子能除太子謚号照見大菩薩と尊奉る。今は辨子皇子と稱へ山上に御墓がある。

「当時武江東嶽に属し、慶長元和の頃は三山共、真言密宗の廻天宥法印の首唱にて自ら天台僧の首唱にてなり天台に正宗の門下となり此件に改定せり。此件はつきり天宥和合せま之れ即ち天宥災禍にかりし因なりと云。武江の武は武蔵國を云の江は江戸の略称なり。東嶽は東嶽山寛永寺なり当時天海は本山にありて名声

ひて浪の露はかなさたよりをなむ告侍るとかや此庵下山三山順孔の序追悼一句を奉るへさよし門徒等しきりにす、めらるゝによりておひく載言一句を連ねて香の後に手向侍るといと憚多き事になむ侍る。其玉や羽黒にかへせ法の目

元禄二年季夏

芭蕉庵桃青標

五日、権見に詣ぐ。当山洞淵能除大師はいづれの代の人と云ふ事をしらす。延喜式に羽州里山の神社と有り、書寫黒の字を里山となせるにや、羽州黒山を中略して羽黒山と云ふにや、虫羽といへるも鳥の羽毛を此國の貢に献ずると、風土記に侍るとやらん。月山湯殿を合せて三山とす、当時武江東嶽に属して天台止観の月明らかに、山傾融通の法の灯か、ほそひて、僧坊棟をならべ、修験行法を励まし、靈山靈地の験初人貴び且つ恐る。繁栄長にしてめでたき御山と謂つべし。(細道本文)

共に高かりき。

（略註）水綿しめは
織袴りに朱を染めて作
り輪裳の服に類似し
たるもの。

「空冠」は白木綿入尺
にて平安時代官人の冠
の如き服に被りたるも
のにて今の冠の元始的

のものなり。此のニ
は翁三山登山記念とし
て御ち帰られし後焼
子権殿地に与へられた
りとぞ。

「鍛冶屋敷」は月山頂
上より十町ばかり下る
處にあり、昔良刀工此
處にて鍛へたる由、伊
川初期走は月山と號へ
し刀工の家系連綿とし
て見ゆ、今の刀工月山
何某もその系を引ける
にや。

（略註）「干將」は支那往
昔の名高き鍛工にして
「莫邪」は其の妻なり。

「三山順礼の句」を翁
が書きたる短冊三葉は
會道が御蔭を現はしめ
り、退隱の所も行李に載
めて、奥瀬園に飛行され
しが、阿湖湖寂化の夜、
同園の獨坐にある門流
の寺院に傳へられしは
更に流可といふ入の手
に入りしは、月山及び
湯殿山の二枚のみにて

夫より六・七の兩日は此處に休息し、八日にはいよく月山
及び湯殿山に登らんと修道の規則に隨ひ齋戒沐浴して全身
白衣に著替へ白木綿なる宝冠を被り水綿津連を首にかけ寸
鉄は勿論、革皮類の器具を禁じ隨行の曾良及び露丸強力の
入夫迄七日の暮方より放齋堂に籠り行事を修し未明に登山
の途に出づ、寔に雲間に足を踏み入る如き高處を攀登り又
は湖底の殘雪をたどりて月山の頂上を拜しそれより頂上か
又は鍛冶屋敷辺に泊り、九日湯殿山を拜して靈湯を足にそ
そきたりと思はる。下りて大綱に出て、大日坊注連寺等を
順拜して十王峠を越え松根黒川を経て羽黒に帰られたるは
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。

十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。
十日の夜半か又は十一日の朝なるべし。

日出で雲消かれれば湯殿に下る。山（細道本文）
山谷の傍に鍛冶屋敷と云ふ有り、此の園の鍛冶屋敷を横
びて爰に潔斎して劍を打ち終り、月山と銘を切りて世に
賣せらる。故の龍象に劍を奉ずとかや、干將莫邪の昔を
したる道に堪能の執淡からぬ事知られたり。岩に腰をか
けてしばし休らふ程に、三又ばかりなる桜の蕾半開きた
るあり、蜂積む雪の中に埋もれて春を忘れぬ透桜の花の
心わりなし、炎天の梅花爰に看るが如し、行尊僧正の歌
の哀れも々に思ひ出て、猶まさりて覚ゆ。総べて此の山
中の微細行者の法式として他言する事を禁ず、仍りて筆
を止めて記さす。坊に帰れば阿湖湖の帯に應じて三山
順礼の句々短冊に書く。

涼しさやほの三日月の羽黒山
雲の峯幾つ巖れそ月の山
語られぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山 鉄も道の旅かな

曾良

羽黒山の合は深かつた
色々苦心して漸く探り
当てたので発掘した。
今は大阪の入光田秀三
郎氏の珍藏と成つてみ
る。

(右のうち羽黒山の句は、痘母には・涼風やほの三日月の羽黒山・と
あるが、細道浄書の際、此の原句「涼風や」を「涼しさや」と訂正
されたものと思ふ)

(細道本文)

(注)

芭蕉は三山参拝了りて羽黒に帰りたるに鶴ヶ岡より、兼
ねて知音なる長山重行及び酒田の瀧湖庵不玉の兩人は翁が
羽黒山帯柱の報を聞付けて早速迎へ侍翁を訪ねた、そこで
南谷の別院にて送別の一會を開かれた。

志るなよ 虹に輝なく月の雲 會慶

杉の茂りをかへり三日月 芭蕉

無情ひ手末の子を引提けて 不玉

湖に消えたる馬の足あと 曾良

年を經し人商人の家ぬまへ 重行

李の花のあしこころさく 露丸

羽黒山を立つて鶴ヶ岡に來りしは大概十一二日頃ならむ。
藩士長山五郎左工門重行の家を宿とせらる。露丸も隨行せ

られた。長山の所は荒町の裏町大昌寺の狭小路で、長山小
路と云はれてゐる。こゝにて僞物の知流子を賞せられたる
にや、これを発句として歌仙行一巻を写はられた。

羽黒山を出て、鶴ヶ岡重行亭

オめつらしや山を出羽の初流子 芭蕉

蟬に車の音添ふる井ノサ 重行

霜後の暮いそかしう、板打ちて 曾良

閑蕨生の末の三日月 露丸

吾類 ちりかゝりたる梨の花 行

鏡に胡蝶と付けしさかつき 蕉

三山の端にぎえかへり行く帆林船 丸

繁なき里は心たまらす 良

栗辨を日毎の齋に喉飽きて 蕉

弓のちからに斬る石の戸 行

赤裡を母の記念に植えおかれ 蕉

雀か残す小田の刈初め 丸

(注)

此秋も門の板橋くづれけり
 叔免に洩れて独見る月
 さめくは夜なへも同じ寺の鐘
 宿の女の妬き物かけ
 婿入の花見る馬に打辭れて
 ものゝ郭は畑に焼ける
 金銀の春も一部にあられたまり
 奈良の都に豆ふはじめまる
 此雪にまつあたれとて登橋けて
 寝巻なからにけはひ美し
 遅けさは目を泣きはらす夜紫船
 ところ／＼に友をうたせて
 午日の庵を結ぶ小松原
 鶴年の殿を踏みつぐす音
 身は蝶のあなうと夢や覚つらん
 こけて露けきおみなへし花

行 蕉 丸 行 良 丸 蕉 良 行 蕉 丸 行 良 丸 蕉 行

（略註）鶴ヶ岡は初
 め大室寺と云ふ最上養
 光領の預長八年改め
 て鶴ヶ岡と改せり。最
 上家没後、酒井家の領
 地となる。

長山重行、通名五郎
 老工門、庄内藩士百五
 十石を賜はる。祖父傳
 兵衛は最上家に仕へて
 廿五騎の將たりしが、
 主家改易後酒井家に仕
 るるも部下の面々を居
 つるに忍びず、微禄をも
 いとはせず、下廿五人を
 も仕へさせ、荒町裏に

明はつる月を行脚の空に見て
 温湯かそふる陸奥の秋風
 初雁の頃より思ふ氷のためし
 山ぞき作る宵のふきぬへ
 尼衣用にまゝる心に
 行かよふへき歌のつきはし
 池の時鳴くこやらいふ呼子鳥
 艶にくもりし春の山彦
 羽黒を立ちて、鶴ヶ岡の城下長山氏重行と云ふ武士の
 家に迎へられて俳諧一巻有り。左吉も俱に送りぬ。川
 船に乗りて酒田の湊に下る。洲庵不玉といふ醫師の許
 を宿とす。

あつみ山や吹海ゆけて夕すかみ
 暮き日を海にいれたり最上川（細道本文）

芭蕉の酒田に着さしは十四日なりしならむ。醫師伊東氏

行 蕉 丸 行 良 丸 蕉 良 行 蕉 丸 行 良 丸 蕉 行

象敷を賜はり部下は皆
 々給人となりて仕へた
 り。故に此の地今以て
 長山小路と云ふ。武芸に達
 せし名家なり。重行は
 元禄六年象敷を蔵中
 町に移りて住めり。此
 の人能詩より和歌に
 名あり。其の遺詠も亦
 殊れり。此の重行の隣
 家に住居せし給人廿五
 人部下の一入に岸本八
 郎兵衛と云ふ人あり。此
 の婿若菜の門に入り
 て公羽と号せり。中々
 の達人にて後百世蕉の
 庄内に文通せられしは
 大方この人なり。

一川舟にのりて、今の
 荒雨橋、當時の人の形橋
 より、芭蕉等は川舟に
 まりて赤川を下り、横
 山、押切、黒森等を經
 て薄暮酒田に達せしな
 り。洲原不玉は酒田の
 医者伊東玄順にして父
 老道遠と云ふ、元禄十
 年五月三日没す。

は沼淵庵玄順といふ俳子を不玉と云ふ。芭蕉は此不玉の許
 に宿る。翌十五日寺嶋彦助亭に於て俳諧

六月十五日寺嶋彦助亭にて

涼しさや海に入たる最上川

月をかりなす浪の浮海松

黒鴨の飛行く庵の窓明けて

蘆は雨にならん雲ぎれ

皮とちの折敷作りて市を待つ

影にまかす宵の油火

不きけんの心におもき寒衣

芭蕉

命蓮

不玉

免連

曾良

任曉

扇風

(典の御道給道)

翁は酒田の風交を後にして、望み深き象淵一見を先とせ
 られぬ。象淵に着せしは同月十七日なり。此地の記事に於
 余り記録に残りたるものも見当らぬは略して記さず。

江山水陸の風光教を盡くして、今象淵に方寸を賣め、
 酒田の溪より東北の方山を越え、磯を懐ひ砂子をふ

みて其際十里、日影や、かたふく頃、汐風真砂を吹上
 け兩膝臍として鳥海の山かくる、潮中に横索して雨も
 又奇なりとせば、雨後の晴色又頼むしと、蟻の苔屋に
 膝をいれて雨の晴るゝを待つ。其の朝天能く響れて朝
 日花やかにさし出る程に象淵に舟を遊ぶ。先づ能因局
 に舟を寄せて三年幽居の跡を訪ひ、むかふの岸に舟を
 あぐれば花の上こゝとよまれし櫻の老木西行法師の記
 念を殊す。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ、
 寺を千満寺と云ふ。此処に行塔ありし事いまだ聞かず
 いかなる事にや。一寺の方丈に建して簾を捲けば風景
 一眼の中に盡きて南に鳥海天をさへ、其陰うつりて
 江にあり、西はむやむやの閑路をかぎり、東に堤を築
 きて秋田に通及道遙かに、海北にかまへて浪打ち入る
 所を汐越と云ふ。江の縦横一里はかり、碓松島にかよ
 ひて又異なり。松島は笑及如く象淵は恨むが如し、
 寂しさに悲しみを加へて地勢魂をなやますに似たり。

象馮や雨に西施がぬぶの花
沙越や輪はぎぬれて海涼し

祭札

象馮や料理何くふ神まつり
藍の度や戸板を敷て夕涼 かきく 曾良

空上に睡蓮の葉を見る

波こえぬ契ありてやみさごの葉 曾良

(細道本文)

翁は象馮に留ること一夜計にして再び酒田に引返し、

不玉其外の人々の紹介にて段々知己も多くなつた。中にも

当港に於て屈指の豪商にて、西鶴の永代藏に其豪奢振を記

されし、體屋惣右エ門王志と呼ばれし人等も交りぬ。或時

この王志亭の會にて、

あふみや王志亭にて納涼の興に瓜をもてなして発句を

乞及て曰く句なきものは喰ふ事あたはずと戯れければ

初真 兼 四にや断輪に切ン もせ茂

初瓜 やかり廻しを思出つ
三人の中に翁や初真兼

曾良 不玉 王志

奥にめて、ころもとなし瓜の味
元禄二年晚夏末 四

此懐紙は元體屋家の家藏なりしが、今は本同家の秘藏と

なりぬ。晚夏末とあれば六月廿八九日なるべし。

或る日暑熱を凌かんとして、芭蕉曾良及び不玉の三人は小

舟に乗りて港を出て岸を離れて涼を納れたるに、北は吹浦

の砂汀より南は温海岳の翠峰一望の下に眺めければ興しき

りに沸きて、
畑の浦江上眺望

あつみ山や吹浦かけて夕涼み

芭蕉

海松 刈る磯にたゝむ帆逆

不玉

月出は閑屋をからむ酒もちて

曾良

土もの電のけぐる秋風

兼

しるしたてのきにやりたるいろ箱

王

蠶の玉をふるふ袋の毛
 烏屋籠る鶺鴒の宿に冬の美
 火を焚く切けに白髪たれつ
 海道は道もなき迄切りせはめ
 枯笹送る武隈の土産
 草枕おかりき寒もしならひて
 波の神に申すかね言
 御供してあてなき我も忍ぶ
 共の世の末も三よし野へ令
 朝勤妻帯寺の鐘の聲
 けふも命と鳩の乞食
 かしけたる花し散らどくみ折て
 塵の鳩の痕所の用
 物言へば水魂にひづく春の風
 姿は瀧に消ゆる山つめ
 剛力がけつま付きたる母徳ひ

良 蕉 玉 良 玉 蕉 良 玉 蕉 良 玉 蕉 良 玉 蕉 良

棺ををさむる塚の光 芝
 初霜はよしなき岩を遊ぶらん
 悉いすの衣を縫く泣く
 明日しめむ雁を棧に生け置いて
 月さへすこき陣中の市
 御輿は眞葛の奥に隠し入れ
 小袴を贈る疾の師
 我が顔の母に似たるも味しうそ
 食にはあらぬ家は賣れども
 奈良の京持ち傳えたる古今集
 花に符を切る坊の酒藏
 鶯の巢を立そむる羽つひひ
 蚕種よきて帯手に取る
 錦木を走りて古き恋を見ん
 小となる色を好む宮廷

良 蕉 玉 良 玉 蕉 良 玉 蕉 良 玉 蕉 良 玉 蕉 良

此の一卷の俳諧は、碓氷紙を横に折りたる懐紙にて、其

淵書は細の海江上眺望と記し三吟三筆の巻と称す。龜崎山
 淨福寺の塔頭、雲龍寺の叢叢であつた。初め半折計りは船
 中の吟なる由、如何にも略筆に見えたが末の方は即ち雲龍
 寺にて滿軸せしものなり。可惜寛延永の春田原の災に罹り
 烏有に歸したとある。いかにも船をいに漕出して海上より
 陸地を見渡しての詠なることは、最上一句の上にて分る。
 以て此句に對する幾多の疑意も解決したわけだ。
 又翁が酒田滞留中、不玉は自詠の歌仙一巻に對し、翁に
 批判を請ひたるに諾せられて持歸られたり。其の後元禄六
 年漸く批評出来上り、硬りによせて通けられしものあれば
 左に記す。

歌仙行

○坊主子や天窓うたるゝ初あられ

海州庵 不玉

連年の休、心精專らに用ふる故、句体重しき候へば、景体多くは景氣
 ばかりを用ふ。是等も景意相應に應いたし候。

○大守居る木の葉ちるなり

大守る言葉、小坊主のさはり登殿り候、雄本の葉葉るはかり打らぐ
 りあるべきや。

○箕を作る庵は月のさし入りて

寄所感心一句体疎ならず、風景非意尤に存じ候。

○蕙の丸太のさび船の半

よろし

○博勞の泊り定めぬ秋の風

句体幽玄、排意妙に覺へ候。

○柿の羽織のくれの稲妻

○祭文の拍子にのゝる虫の声

拍子にのゝると、虫の声にとりたるところ、聊かいやしきにい。

○瓦落したる浅茅生の中

奇意の風景、大感斜ならず候。

○水丸のから松ひとりみどりにて

水丸となくて瓦あしらひたきひ。

○富士は世界の雪の大將

富士を野端に競けん道通勇士の好める事には、然る時は、大将の空巻
(深し)。

○ 幽なる筋より寒の終り初め

心はかよひにてあはれに待れども句面休のとり寄りうるときにや。

○ 小町の像のおかまるかな

珍重々々

○ 濼とりに雀の遊ぶ朝日かけ

○ 船のむしやく水の水上

○ 三越路や乙キトの寺の花盛り

乙寺は御教にまかせ、普門の下向の節子も立ちより捧み申し候。

○ 穿入の子が懸すえり春

嗟事のへ休新、此一味珍重々々。

○ 夕月の藤の眉の美しさ

○ 小峯垣より鏡とぎ呼ぶ

うつり所よく侍る。

○ 古井戸に咲きかゝりたる桐の花

寒心。

○ 脚 躰もとらで捧む謹佈

俳諧上達此句にあらはれ申し候、猶御句案、老後のお楽しみたに候。

○ 懐の餅を茗してこちくと

○ 酒通る間は一座 離 面

○ 若武者の障子を蹴こむ月の影

○ 泣くく露にぬる、御興

○ 隠逸に水 無 瀬の菊に花咲きて

一句淡からず、余情限りなしとや申さん。

○ 悟り初めたる山もとの壺

夕は秋と何思ひけんとか、三句のわへりうるときか？

○ 祈りくは三社を掾り馬糞煉

一句むつめしきにや。

○ せら襲の作り 氣遠ひ

老も有るまなり。

○ 世の中は 師走の 物おもひ

めしらの苦しからず。

○ 歳入てありく女房の杖持

大徳、新造、狂意相兼ね。

○ 道辺の名はことくし茶屋立ちて

一句絶句。

○ 履を埋むる御願淋しき

とりのき、やう神妙。

○ 肩衣に雨とはなしにふりかゝり

一句奇時。

○ 轄は雲井に金のしんぎ鑪

よろし。

○ 黒坊が帆繩をたぐる花の春

おなし。

○ 音はいちくのなのな

一巻聚覽吟斜ならず候、近年武府の風雅、分々散々通々郊路の聲も相見へ候ところ、微塵方寸相傳へて、我が國鄙のたわらよりの風雅を見せしめ侍る、誠に殊勝の事なり。予曾以流羽の断筆といへども、遠國の志といひ、

先年行脚の情、忘れ難きによりて、聊評詞歌書加ふるのみなり。

元禄六年春中

芭蕉庵 桃青

かく数日の滞留に風交を重ねしも、諸友と袂を分ちて酒田を出立せしは六月二十八九日の頃なるべし。それより鶴岡に再び立寄られしや、或は西山下を通られしや不明なり。湯海軍ヶ岡を経て越後路に差かゝり、越中の國市ちか振び迄九日間は、病氣の爲めに日記をしるさずといふ。

酒田の名残日を重ねて北陸道の雲に望む、遙々のおちひ胸をいたましめて加賀の笥まで百三十里と聞く。鼠ヶ岡を越ゆれば越後の地に歩行あゆを改めて、越中の國ちかつぶりの関に到る、此間九日、暑濕の勞に神をなやまし病おこりて事をしるさず。

文月や大日も常の夜には似ず
荒海や佐渡によこたふ天の川（相道本文）
庄内を於ける芭蕉（註）

芭蕉の句碑

「奥の細道」その他により芭蕉翁と吾山形縣とは浅からぬ関係にあるわけであるが、その行脚、宿泊等記念としての句碑も縣内各所に存在してゐる。その数も相当にあり茲に搜れてゐるものも多分あることゝ思ふが何れ機会を得て完全を期し免に角知名のものだけを記す。

句

所在地

- 1 松風の落葉や水の音すゞし 山形市千歳公園 亀松閣
- 2 朝寝さを誰まつしまの片心 山形市 大竜寺
- 3 眉はきを佛にして 紅の花 山形市外 滝山村草清水
- 4 のどけさや岩にしみ入る蟬の声 東村山郡漆山村 半沢久吉邸宅
- 5 夜中や物にもつのかずなく雲雀 天童町 建興神社
- 6 五月雨をあつめて早し最上川 左沢町 弥念寺
- 7 涼しさを我宿にしてねまるなり 尾花沢町 養泉寺
- 8 しばらくは花の上なる月夜かな 寒河江町 天蓮寺

- 9 有がたや雲をかほらす南谷 羽黒山 八幡坂
- 10 涼しさやほの三日月の羽黒山 羽黒山 荒沢
- 11 雲の峯幾つ鋸れて月の山 企上、芳賀兵左エ門邸、寒河江町八幡神社
- 12 語られぬ湯殿にぬらす秋かな 企上、西村山郡大井沢村の湯殿山神社
- 13 珍らしや山を出羽の初茄子 鶴岡市荒町日枝神社境内
- 14 あつみ山や吹浦かけて夕涼み 酒田市 日和山公園
- 15 古池や蛙飛びこむ水の音 天童町一日町 村山直彦邸
- 16 旅に病んで夢は枯野を明けめぐる 西村山郡大谷村大沼 浮嶋神社境内
- 17 水のおく氷室にねむる柳かな 新庄町金沢八幡神社
- 18 柴つけて馬のもどるや田植橋 最上郡東小西村向町 白藤庵次郎邸
- 19 山中や菊も手折らぬ温泉の句ひ 南置賜郡尚家村湖 空ア藤右エ門邸
- 20 さゝれ蟹たゞ意ひあるく清水哉 赤湯町 目、水
- 21 五月雨をあつめて早し最上川 鮎海郡上郷村 山寺
- 22 蛸壺やはかなき夢を夏の月 加茂町 瀧病院下(西田川郡)

◎備考、11山中やの句は加州山中温泉、22蛸壺やは揚州明石の詠である。

庄内に於ける芭蕉大尾

昭和十年三月十五日印刷納本
昭和十年三月三十日發行

(定價二十五錢)

著者 齊藤治兵衛

(玄々堂芋汀) 鶴岡市日市町
鶴岡市一日市町甲十三番地

發行者 尾形喜四郎

鶴岡市一日市町甲十三番地

印刷人並 三浦信吾

全上

印刷所 喜峰社

版權所有者 尾形喜四郎



◎表紙繪並題字◎
玄々堂芋汀筆

發行所 鶴岡市一日市町甲拾參番地 喜峰社

終